

翻刻 二 樂 軒 詠 草

柴 田 光 彦

飛鳥井雅康の家集は『私家集大成Ⅳ』に、大阪市立大学附属図書館蔵の『雅康卿詠草』が収録されている。他は個人蔵の田中家本が知られるのみであるが未調査であるという。ここに紹介する一本は、本館新収の新出本である。

底本は、二四・八cm×一九・〇cmの半紙本で、若干の虫損があり、料紙を裏打の後に仮綴としたものである。墨付本文二九丁、一面一二行、部立は二字、題詞は四字下げ、一首一行に書き、近世中期以後の写しと思われる。表紙白茶色、紙表紙。外題左肩「二樂軒詠草」。請求記号 特へ四・七六二二

所収歌数は三六八首。春八九首（一八七・夏五〇首（六〇三元）・秋五五首（四〇一九四）・冬三九首（九三三三）・恋六一首（三三一九四）・雑七四首（元卒三六）、計三六八首である。

早稲田大学本（以下㊟と略記）と大阪市立大学本（以下㊤と略記）との違いについて『私家集大成』によって略述すると概ねつぎのごとくである。

㊤の歌数は、部立の明示はないが、その歌題から、春八九首（一八七・夏五〇首（六〇三元）・秋五六首（二四一九五）・冬四〇首（九三三三）・恋（三六二元）・雑七六首（九三三七三）、計三七二首であり、㊟より四首多い。春は、㊟の三・三三は、㊤の三・三四と順序に異同があるが、歌数は同一である。夏は同数。秋は㊤が一首多いが、㊤二七と二七三は重複しているので事実上同数である。㊟㊤二六の

下の句は、㊦は二三・二三と同じ句で誤写、㊦をとるべきか。冬は㊦が一首少く、冒頭の第二首目（㊦二五）を欠く。詞書よりみると㊦の脱落であろう。恋は同数であるが、㊦三五にあたる㊦三七は下の句を欠く。雑は㊦が二首少い。㊦の第五首（㊦）を㊦は欠き、（㊦三六のつきにあたる）、㊦の王昭君の第二首（㊦七）は、㊦の逐日懷旧の第二首にあたる三六と同じ歌である。また、㊦社頭松三六八を㊦は欠き、㊦三六五の題詞が社頭松となっている（㊦三六五社頭松）。

結局のところ、㊦本に三首の脱落はあるが、子細にみると、㊦本の歌意不通のところを㊦本によって補うことができ、両本相俟って一本をなすというてよいと思われる。

そこで、㊦本を翻刻紹介することにしたが、㊦本との異動を傍注の形で示した。

なお、翻刻にあたり用字については『私家集大成』の凡例に従ったが、その他のことについては多少の違いを生じたところもある。

二樂軒詠草

二樂軒詠草（外題、左肩）

飛鳥井雅康郷号二樂軒宋世（朱、見返左上）

春

都立春

一 松の雪もかつ消そめて春のくる 都はのへや霞たつらん

春日社に七日参籠して、五十首歌奉りし中に、立春

二 あすか川昨日の年もけふはせに 月日なかれて春はきにけり

早春

三 我そけにしつのをたまきとしの緒を くるしきまてに春を迎て

初春

四 けふといへはむかふるとしの数ならぬ かきねの中も春めきにけり

翻刻 二樂軒詠草

五 みな人のことふきよりや偽の ある世しられて春はたつらん

六 めつらしき春待えたることふきも ことつきぬへし千世の行末」

七 ふりにける身をは応れて物ことに 先あらたまる春そうれしき

八 としをへてきはいよ／＼たのしきを つみをく宿に春はきにけり

或人、太神宮に奉るとてすゝめ侍しに、曉霞

九 伊勢しまやまた夜をこはていちしるく 見えつる浦にかすむ春かな

霞隔行舟

一〇 とる楫ので玉もゆらの見崎より 霞をいつる春の舟人

二 塩くもりかすみそへてやつたへらん かし音はかりちるのうら舟

住吉社にたてまつりし歌の中に、浦霞

三 春の色やあさかのうらのみをつくし しるしはかり

にたつ霞かな

海辺霞

二三 浦とをくかすみのみおにいるあまは 浪にもぬれぬ
かつきをやすする

滝霞」一

二四 ぬき^(ふ)やいかに霞のころもたてはかり はつれてお
つるたきのした糸

文明十四年六月、大将家^樹にて百番歌合に、原上霞

一五 春といへはかすみも八重のあしふきに ひまこそみ
えねこやの松原

春天象

一六 春といへは霞の衣をはるはたに 日のたてぬきも見
えぬ空かな

春來鶯遑

一七 ほとゝきす人にまたるゝ心をや うつしうへ木のや
とのうくひす

竹裏鶯

一八 うくひすの宿はとゝへはこたう也^(因なり) いともかしこき

竹のはやしに

鶯呼客

一九 青柳のまゆねかきたれ待人を をのれしりかほに鶯
そなく

竹鶯」

二〇 風も雪も折へくもあらぬなよ竹を やとりにしめて
きある鶯

二一 花さへも時しる鳥のしたつえに 匂ひをふくむ梅さ
きにけり

若菜

二二 出てつまむ時をもえこそわかな生る 野へといふの
へに残るしら雪

松残雪

二三 ことし生の松にふるよりすみの江の 残りの雪の程
をしるかな

梅

二四 咲出るをのか物から花にそふ 匂ひはよその梅のし
たかせ

青蓮院にて百首歌人々によませられしに、夜梅

三 豆 閨にもるすきまの風にともしひの 光を花とにほふ

梅かゝ

「寢覚思梅」二

六 おもひねの名残もかなと春の夢 さめてまたるゝ梅

のした風

梅風

七 花によき匂ひに吹てちらさしと 心をわけよ梅のし

たかせ

梅薫風

八 さそひきて帰るつてにもうれしとそ いはまほしき

は梅のしたかせ

柳

九 一とをり過つる風の名残にや ふかてもなひく青柳

の糸^露

諏方社百首に、おなし心を

三〇 かくしあらは花にもいたく恨しな 柳によはき春の

朝かせ

隣家柳

三 ぬしやたれなひく柳は中かきの こなたかなたにい
とそみたるゝ

大樹内大臣殿七廻とて姉小路宰相すゝめ侍し百首」

に、春月

三 春をへてきのふのこともとたとる身に おもへは月は

かすまさりけり

山春月

三 いかゝみむよはのかすみのくらきより くらふの山

の春の月影

内裏にて後月次三首に、春月^(因世)幽

三 としをへてかすみはそはし身の春を ことはる月や

おほらなるらむ

夕春雨

三 かすむともくもるともなくけさみしは 此夕暮の雨

にそありける

春雨

三 かくしあらは七日もひめやさほ姫の ころも春雨け

ふも晴せぬ

帰雁

三 長月の其はつかりや春も又　をくるゝ空に帰り行ら

む」三

三 狩人もいまや野臥のあつさ弓　空にみたれて帰る雁

かね

三 秋はこぬためしありとて花の春　一たひとまる帰る

雁かね

四 玉つさやおちほとゝもにひろひをきて　をのか物か

ら帰る雁金

四 待むかふ心を秋に見えをかは　帰るをしたふ雁やと

まらん

四 世中をおもひ(因つゝ)てぬる雁かねや　をくれ先たちわか

れ行らむ　* (●)藍色ノ不審紙ヲ貼ル。)

浦帰雁

四 住よしとおもはぬかりや浦の名の　なかゐせしとて

今帰るらん

帰雁似字

四 身にそしるみれとよまれぬ鳥の跡を　かすむ雲井に

うつす雁かね

四 よまむとてふりさけみれは露の跡も　(因) (たつ雲)かき夕空にか

へる雁かね

遊糸

四 はるゝ日にさらすにみるは乙女子か　これや手引の

いとゆふの空」

大納言家にて百首歌合によませられし、花

四 大かたにはなみる人や雲雪と　心をわけてまかへき

ぬらん

凌霄尋花

四 かすみこそへたてとはなれあしかきの　よしのゝ山

のはなにゆけとも

待花

四 よしやたゝいそかてをみむ山さくら　さけはかつち

る恨もそある

四 我そ先いそく心を色にいてゝ　(因) (ナシ)また咲やらぬ花に見

えぬる

三 いそかるゝ心もくるし春毎の はなに偽なき世なれ
とも

折花

三 山さくらさのみはおらしこむ春の 人めかれぬと人
やとかめむ

室町殿にて三十首歌人々によませられし時、馴花

三 なれ／＼（し）見しは名残のふること＊ても さすかに花
の春はわすれず＊四 「し」の上に薄墨で
を書くか。

おなし家にて、静対花といふことを

三 はなや先きみに心を移しをきて 千年の春もなれむ
とすらん

盛花

三 我心うつるてふ名はさもあらはあれ 折らて過うき
花山さくらさかり哉

三 雪とのみまかひはてゝもかひそなき 花因にとわくまで
花はさかなむ

処々花盛

三 我ために花やはまたむ日数へは よし一かたは移ふ

をみん

遠花

三 宮こいてゝけふこそきつれみよしのゝ 花の白ねを
ねこし山こし

三 今はたゝ雲のよそめの山さくら ちりての後や花と
しられむ

花非一樹

三 先さくに心をとめはよしの山 おくなる花をいつか
みはてん

大原野の花みにまかりて三十首の題をさくりて人々歌
をよみ侍しに、夕花

三 春の夜のいく夜にか又かへてまし 花にくれ行一刻
をは

花似雲

三 たつた川にしきなかと見しことを よしのゝ山の
花にしるかな

三 雲ならはかゝらましやは山さくら こりある花の匂
ふたかねに

花似雪

齒ちるも雪つもるも雪に偽の ある世をしらぬ山さく

らかな

深山花

空めかれせすわけ入まゝにおくまてと おもはぬ山の

花を見る哉

滝花

空はなさけはこれそよしのゝたきにそふ 水まさると

もまかひはつへき」五

花下友

空このみや我とひとしき人ならむ くれ行花のあか

ぬ(因)つかへるさ

花留人

空我そくらす鳥は帰りてはな鈴 ふりすてかたき春の

ほかけに

花(因)浮水

空よしの川きしなる花はねにたにも かへらぬ水にな

かれてそ行

大樹内大臣家百番歌合に、見花忘恥

七心たにあかすはよしやさく花の かけのくち木と人

は見るとも

風静見花

七木のまにもかすみのまにも花はさけ(因) 風のまよりそ

見るもかひある

風前花

七ぬきとちる程をは神に手向ても 花にしはしの風ま

つりせん」

苔路落花

七えそゆかぬうすき氷をふむよりも 花にむもるゝ苔

のかよひち

落花

七風にのみちるとはいはし移(因)はむ 日かすも花をさそ

ふとそみる

遅日

七道をつとめ君につかへは春の日を いたつらにやは

なかしとおもはむ

花山院にて月次三首に、雲雀揚

其をのか心ひきのゝつゝら末つゝに おちむ芝生をた
つひはりかな

霞中雲雀

七 空かけてたつや霞のあはつ野に をのれきえ行タひ
はり哉

喚子鳥

六 よふことり子をおもふ道はかはらてや なれも心の
やとになくらん」六

按察大納言親長家月次三首に、連日苗代

五 日数へはさこそ心もつくはねの このもかのもの小
田かへすとして

藤

四 春は先風おさまれとさく藤の 下にかくるゝ庭の松
かえ

浦藤

三 むらさきの一しほならて田子のうらに くむとも見
えぬ春の藤浪

刻翻二葉軒詠草

因(風) 滝下藤

三 さく藤はたかもとゆひそこむらさき しろきすちな
き滝の水上

三 岩かとかゝれる藤のむらさきも くだけておつる
因(風) 滝のしら玉

松藤

四 としふれとかゝれる藤をちからにて 松は老木の色
としもなく 因(し)

花山院月次三首、藤埋松」

五 ちゝせをはよそにやらしとさく藤の 波もてゆへる
因(と) 庭の松か枝 * (⑨不審紙ヲ貼ル)

藤花埋松

六 春の色ふかさもしらぬ藤なみに 小松のみさははさ
すかひもなし

暮春花

七 ぬさとちる花をははなの心とや 手向て春にわかれ
因(い) 行らむ

惜三月尽

六 けふといへはちりていくかの木のもとを　さらぬ別
のはなの春かな

三月尽

六 はなは猶残りあれとも我心　つくしはてつる春のく
れかな

(一行分空白)

夏

首夏藤「七

六 昨日かもくれぬとおもへは春の色の　よせてかへら
ぬきしの藤浪

新樹

六 老木ともわかほそわかむ若葉のみ　軒はの山にしけ
る色哉

右京大夫源政元、北野社にたてまつるとてすめ侍し

三百首歌の中に、卯花

六 はなの色は夢かうつゝかうつ木原　まかきの月もあ
りてなければ

宰相中将殿にて三首歌に、卯花似雪

六 谷川やこほらぬ水にふる雪も　積りにけらしさける

卯花

(因徳) 挿葵

六 心をや二はにわけて神と君　あひにあふひのかさし
なるらん

あふひ

六 いつのまに露をく物そあふひ草　あくれはやかてむ
かふ日影に」

待郭公

六 見せはやな山ほととぎす山とりの　かゝみのかけに
なく世なりせは

六 春は人をよふこ鳥たにある物を　またれてもこぬほ
ととぎす哉

郭公

六 なきぬとてたかひにかたるさはきより　やかてまき
るゝ時鳥かな

六 うくひすのふるすにはあらて郭公　山のかひよりい
つる一声

一〇 のをかとしや老その杜のほとゝきす おなし事のみ
なきてすく也

一一 ほとゝきすこそとやいはむことしとや いはせの杜
になるゝふるこゑ

内裏にて三首歌よませられしに、夕郭公

一二 郭公いまやみ山にかへるらん けさきなきつるゆふ
くれの声

江州蒲生刑部大輔貞秀許にくたり侍し時、郭公遍「ハ

一三 里なれてあまりしなくも時鳥 はやく深山にいらむ
とや思

山郭公

一四 きく人もありとやこゝにほとゝきす み山をいてぬ
こゑのきこゆる

野郭公

一五 ほとゝきすなきていつくにとふひのゝ 野守はきく
やさ夜のこゑ

宰相中将殿にて三首歌に、寝覚郭公

一六 またしてもきくへき物かほとゝきす ね覚そ老はう

れしかりける

夏歌中に

一七 老てこそまれなる声はしられけれ ねぬよもきかぬ
時鳥（ナシ）かな

早苗

一八 住よしのきし田のさなへ忘草 何をかたねとわきて
とるへき

採早苗

一九 さなへ草とるかとしればいな妻の ほのうへてらす
まにそうへをく

早苗多

二〇 隙やなき千町にはこふあら玉も 手たまもゆらにさ
なへとる也

盧橘

二一 雲のうへやしける桜のその葉さへ 匂ふ御階にさけ
る橘

五月雨

二二 てにもとらてけふもさ月の玉はゝき ちりなかれ行
（ナシ）
きやとの

雨の中庭たつみかな

二三 はてや又水なき空となりぬへき いまふり尽すさみ

たれの比

二四 ふりそめて久しくなりぬ乙女子か 袖ふる山のさみ

たれの空

二五 かはり行かけしあればや月も日も 見えしとくもる

五月雨の比

二六 あた波はたつとも見えぬ山川すの あさき瀬もなき五

月雨の比

二七 ふもとにはあらぬうき木もなかるめり 亀の尾山の

五月雨の比九

五月雨久

二八 けふいくか雲のみおにて早瀬川 日数なかるゝ五月

雨の比

滝五月雨

二九 さみたれややはれかたきあになる神も ふみとゝろき

の滝津岩なみ

水鶏何方

三〇 まきの戸もあけさらましをさきたゝぬ くゑななり

けりいつち行らん

夏筵

三一 はしめするこよひは月の宮人あもに 我さむしろをかし

てすゝまむ

夏月

三二 おもひこす山のあなたの月よりや 明やすきよをし

らて見るらん

越前国にくたり侍しに、朝倉弾正左衛門尉孝景もとに

て三首歌よみ侍しに、浦夏月

三三 夏といふおふのうらなしさ夜中へはに なりもならずも

あくる月かな

内裏にて月次五十首歌よませられしに、竹てし亭夏月

三四 なかめわひぬ今は我身もたけあめる かきは月の

明やすき影

瞿麦

三五 もゝしきに君かうへをくはななれは 亀のうへなる

山となてしこ

庭罌麦

二六 夏ふかみまかきにかゝる花のたけ 過にけらしな
てしこの露

籬罌麦

二七 やとりとるかすもあらはにゆふくれの まかきは山
となてしこの露

野夏草

二八 いはしろの野中の松のそれならて むすふはかりの
露のした草」一〇

夏殖物

二九 そのかみのいつよりさきて五ひらの かすにもたら
ぬあちさるの花

夏野

三〇 ^(因)荒^(つ)くす^(因)柏野にあらぬ世中も となりかくなりかは
るをそみる

寄鶉夏

三一 いつる日にしはし羽ほすうは玉の よはにくたりし
舟かへるみゆ

江螢

二三 身をつくしふかきおもひかとふほたる 雲のうへま
ていなさ細江に ^(因)四

水辺螢

二三 下水にかけみぬ程はなかれ江の もにうつもるゝほ
たるとそおもふ

蚊遣火

三四 はかなしやかやりの焼火による虫の 身をい。つら
になすもこそあれ」 ^た

夏虫

三五 口なしの一しほそめのうすころも しのにかけほす
蟬の声かな

夏歌中に

三六 木のもととは時雨やすらんうつせみの からなてしこ
の色そ露けき

文明十四年六月、大樹内大臣家百番歌合に、麓納涼

三七 しはしとてすゝむ麓のなら柴の なれはまさらぬ秋

風そふく

徳大寺左大臣家月次二首に、夏被

二三 かひそなき此輪のうちに祈れとも 道に我名のこえ

ぬ御被は

六月被

一五 うき事のたえぬみそきははらへして すゝきし水や

帰りきぬらむ

秋「二

七夕

一四 こよひしるやたゝ一とせは川と見て わたらぬ中の

ほしの逢瀬を

一四 たなはたに六十かしつる言葉を いつかへさはる色

のそふへき

一四 たなはたにかしつる糸のふしまれに あやかりやす

き契とやおもふ

七月七日

家にて二首歌、人々によませ侍しに、織女有手向

一四 もろ人のけふの言葉たなはたに 我こそかりて又手

向けれ

七夕迎夜

一四 天河はや老そふ夕つゝの 星のまきれと契をやまつ

内裏にて、おなし心を

一四 こよひあふ事はたかはしたなはたの 八十のちまた

にゆふけとふとも

七夕人事

一四 ありかほに何をたむけん世にわひて 我こそからま

ほしあひの空

七夕興

一四 雲井にてあひかたはぬ織女も としにかはらぬ手

向をやしる

萩

一四 見る夢をわするゝ草の種ならし 秋風すさふ夜半の

萩原

夜萩

一四 秋風のするわさならしおきのはに よるはすからに

音そよくなり

萩露

一五 秋風にたへすそみゆる末の露も とあらのご萩花に

みたれて

萩露滋

一五 萩か枝そしつ心なきしら露の

をくとはなひきぬと

はみたれて

萩如錦

一五 真萩原をるやにしきのぬきの糸を たえず引まの野

への秋風」一二

はなすゝき

一五 過かてに見るをもやかて花薄 まねくによれる心と

やおもふ

薄

一五 身をかくすやとにはうへし花すゝき まねくたより

に人もこそとへ

槿

一五 さきつくはいつれの花かまさるへき 秋に久しきや

との朝かほ

虫

一五 をのれのみあらはれやらて霜の後も 草のまかきに

松むしそなく

一五 いく夜かはつゝりの袖をきり／＼す たれにたむく

るこゑとしもなく

野虫

一五 秋の露のをきとる草かはしたかの とや野にしけき

鈴虫のこゑ

深夜虫」

一五 なれたにもこむ夜のやみはかなしとや 其暁を松む

しのなく

初雁

一五 玉つさをたれに見せしとおほひはを かさなる雲に

雁のきぬらん

一五 真萩さくいつくのやとをはしめとか なみたおとし

て雁はきぬらん

浦雁

一五 しほ／＼となきてそきつるうら波の たつやかとり

のころもかりかね

雁作字

一三 くる数はみそもしあまり一つらの 風のすかたにわたる雁かね

鹿交草花

一四 さをしかも妻とふをのか泪には しからみしらぬあきの萩原

杣鹿

一五 そま川やなれも心の引妻に くだすいかたのさをしかの声 二三

秋夕

一六 さのみやは秋もうからむなかむるに 昔のそはぬゆふへなりせは (因)(口)

秋夕傷心

一七 うきこともしけきむくらの門さして あはさらましを秋の夕くれ

月出山

一八 みかき出ぬこよひはさらにさらしなの 山もおもはぬ雲の上の月

初昇月

一九 月さへもくるしき物か山のはを (因)こるくまなきのさよのほりかねたる影 月かけ そほのめく

月

二〇 露のたてよこのゝつはな打なひき 残るくまなきよはの月影

二一 月やしる待いつるよりあくるよに たれか心をそへてめつらん (因)(ハナシ)

二二 月見てもなくさめかぬる秋をいかゝ やとこそ常のさらしなの山 (因)(山)

二三 亦よりもこなたの秋の月をみむ みつれはかくる影もう (ハナシ) らめし

暁出月

二四 待えてもいるかことくに明ぬめり しのゝめちかき弓はりの月

野月

二五 月ぎよきすかのあらのゝ露のうへに ふすて (因)(き) の名さへうらめし

月前萩

一六 露やをく光やおもき萩の 枝もたはゝにふくる夜

の月

橋上月

一七 うき雲もかゝらぬ月のくまなれや 松原とをきあま

のはしたて

浦月

一八 あま小舟さゝてやこよひいかり繩 なかるの浦の月

にあかさむ

一九 やはらくる光もそふや神しまの 磯まのうらにすめ

る夜の月」一四

海辺見月

一〇 あま人も老^{月みる秋は}となるともこれそこの つもりの浦^{に老な}の月

はみるらん

湖辺月

二一 しかのうらや秋は光を花園に ふりせぬ物か波の上

の月

文明十四年六月、大樹内大臣家百番歌合に、月似鏡

翻刻 二 楽 軒 詠 草

二二 むかへともしらぬ翁かますかゝみ かけて出たる月
人おとこ

対月待客

二三 とひくやと人待よはは宮こにも おはすて山の月を
見る哉

秋月

二四 月にやはおしま^れぬへき秋ことに かたおもひして
我世ふけぬる

惜月」

二五 半天によそなる人はなかむらん 軒はの山に月かた

ふきぬ

二六 入月をしたふおもひの色見えは にしにあさまの山

やもえまし

田上稲妻

二七 坂こえて行程もなき光かな あへの田面にかよふ^い

なつま

擣衣

二八 よそにたに夜さしむられてをく霜の 白麻衣うたぬ

まもなく

遠擣衣

一八 霜は猶をきそはりつゝうつ声の 枕にきゆるさ夜衣
かな

老対菊

一九 花やしる我もむかしはみかさ山 名をかるぎくの色
はかはらて

黄葉

二〇 くれなるのにほひにそむるうす紅葉 (因一入) これもちしは
の秋の色かな 一五

秋山

二一 身を分て入ぬる物かたつた姫 (そめのこさめ)
一夜にそむる四方の そめぬ色なき

山のは

紅葉深

二二 山姫の木々の錦はたなはたの 手にもおとらぬ手染
とやみん

二三 そめつくす秋はもみちのかたはらの 又み山木とな

るさくらかな

冬

初冬時雨

二四 冬きぬとみやこもけさは八雲たつ その八重かきは
さそしくるらん

枕上時雨

〔欠〕 因 (手枕にきけは程なく杉板もて ふける間をもるし
くれ哉)

因 (時雨)

二五 しらすなりつゝに時雨のふる人となりみならずみ
さためなき世を

二六 むらしくれ軒の玉水とく／＼と たかいそけはかや
かてすくらん

二七 一とせのめくるにつれておもふには 猶過かての時 む
雨とそそく」

ら時雨かな

落葉

二八 梢にも錦たえけり一とをり 吹つる風のもみち
は

二九 あらしこす麓の尾花打なひき 袖にこきいるゝ紅葉

とそみる

二〇二 にしきか見えし紅葉も散ぬれば 後はあくた火又
こかるらし

冬関

二〇三 木のはちる関の外山の山風も さむく日ことにかは
る声かな

霜

二〇三 このねぬる朝霜ふかしけふの日の てりこき程を空
にしるかな

寒樹交松

二〇四 冬かれは葉もりのかみも松のはに 移りやすらんか
しは木の杜

水

二〇五 遣水のしつくはかりになかれきて こほりはてぬも
あはれにそきく」一六

二〇六 薄水池のかゝみに見えてけり うらなるとりや鳩の
かよひち

葦間水

二〇七 冬をあさみ入江にかかるゝあしつゝの ひとへはかり

とつる
にこほる比かな

水門滝水

二〇八 冬さむみこほればこれもふしなくて たえぬる物か
滝のしら糸

千鳥

二〇九 いつかたに浦つたふらん風ふけは おきつしら波た
つちとりかな

鴨

二一〇 さゆる夜やをしの衾をかる池に とみなひてなくあ
しかもこのゑ

雲

二一一 夕まくれめにみぬ雨やましるらん 雪に音あるまき

の板屋は

二一二 見るかうちはたゝかきくらす雪なから みそれなり

けるたま^(ハシ)り水哉」
庭たつみかな

拍霞

二一三 山風の音にはあらてならのはを ならしかほなる玉

あられかな

④(尾)
屋上聞殿

三四 えそわかぬ雪にもあらずみ^{④(時雨)}それにも あられくたけ

てもる板間かな

網代群遊

三五 氷魚よりもよりくる人やおほ舟の たゆたひくらす

うちのあしろ木

雪朝眺望

三六 朝戸あけて我世のほかのなかめかと 雪におとろく^{④(此)}

四方の空哉

三七 これや此一夜にかはるむは玉の くろかみ山のけさ

のしら雪

雪朝遠樹

三八 けさみれはおもはぬみねのかけ橋を 雪もては^{④(わ)}やす^{④(ミ)}

松の下折

浜雪二一七

三九 ふみ分て人もこぬみの涙^{④(こ)}つらに 波の跡みるけさの

しら雪

積雪

三〇 ふりそめて松のはしろくみし雪も いくへになりぬ

みよしのゝおく

月前雪

三一 水にのみふるをやはいふ月にたに 光きえ行庭のう

す雪

竹雪深

三二 ふる雪に先下おれし竹のはや ひとりそめたる色を^{④(て)}

みすらん

雪埋松

三三 ためしあらはみやこにやりて見せはやな まかきの

嶋の松のしら雪

雪中侍人

三四 うつもれぬ心の松もふる雪に 色し見えねはとふ人

やなき

舟中雪席波

三五 雪のみか又波かせのあれの崎 こきいてゝまよふた

なゝし小舟

鷹狩

三六 たかは羽つえ我はかり杖けふつきて 帰るかりはに

心とゝめつ

三七 たつ鳥にあはさらめやははしたかの こゐせし木居

の下にかりつゝ

三八 冬の日はをのれにもにす山鳥の 尾上こすまにくら

すかり人

狩場暮

三九 おち草はめにかけなからくるゝ日に あすの私たち

とかり残しつゝ

④(場日暮)
鷹狩曇

四〇 狩ゆけと草にはとりも大せむる 声はかりしてくら

す野へ哉

爐火忘冬

四一 のとかなりはやたつ春にあたる火の あたりは年の

内としもなく

禁中神樂「一九

四二 きり／＼すもゝの雲ゐの御園生に^{④(ほとけ)} 声あらためてう

たふ声かな^{④(タ)}

爐火

四三 ふくる夜に又かきおこし春をさへ 手にまかせたる

埋火のもと

恋

忍恋

四四 おもふともこふともいはぬ我なみた 誰しらせてか

先にたつらん

四五 いつまでか心のうちにこむらさき わかもとゆひし

こともくやしと^く

四六 世には名のもるやもらすや哀身を 二にわけて人に

とはゝや

四七 さのみ又^{④(たゝ)}おもはぬ中と見えむしも なれぬる身にや

あやしかるへき

四八 書やりし其一言もいくたひの 人まに筆をとるとか

はしる

四九 ぬきかへはいかにせよとて文をたに をき所には袖

をなしけん

忍久恋」

二四〇 つゐにかく涙にくちてぬきかへは 我袖よりやうき

名も(ハシ)らさむ

互忍恋

二四一 末とけぬ我にあた名はたゝしとて 人は猶こそつゝ

む中なれ

祈不逢恋

二四二 たのめ猶これよりまさむえにしあらは あはぬや神

のしるしなるらん

二四三 けふこそすはあすはの神にさす紫の しはしも人のう

さを祈らん

忍祈恋

二四四 神にたに心をくくなる中としれ 我ぬきことを人やき

くとして

祈恋

二四五 神かきにかくる心もはふくすも うらみてかへる恋

の道かな

依恋祈身

二四六 あふまての事こそ神のかたからめ (因)我ぬきことを ぬきことのはを

ぬざとちらすな」一九

祈久恋

二四七 せめてさはおもふかたにやかよはまし づれなき神

にはこふあゆみを

尋
忍恋

二四八 これをさはおなし心か人は又 我にかくるゝやとや

たつねし

待恋

二四九 たのみこし心のうらもむなしくて 我偽にふけやは くるよは我

てまし

二五〇 またるゝをむくへとおもふ心たに よその契は又そ

かなしき

待空恋

二五一 ふけはてゝさはるといふに人もかく ねぬよを同じ (因)は

心とおもはん

契恋

二五二 かはらしと先そたのむる我命 人の心もあすはしら

ねと

契途中恋」

二三 めくりあはむ契たまふな玉はこの 道はかた／＼わ
かれ行とも

不逢恋

二四 おもひ絶ねおもふ限を見て後 猶つれなくは何を
たのまん

二五 しぬはかりおもふといひし後や又 世にふる身とも
しらてつれなき ある身とたにも

二六 おしからす我たにおもふ命をは 人にあふけはいか
ゝかへまし

ひとりね

二七 おもひとけはたか逢そめし行衛とて 又独ねにこゝ
ろいらるゝ

名をおしむ

二八 命にもかふれはかふるあふことを おもはぬ中や名
をつゝむらん

忍逢恋

翻刻 二 楽 軒 詠 草

二九 深てとひあけぬにいそき人めよく 契はいつを隙と
しもなし

会恋」二〇

三〇 こよひこそたもとほとつき折しまれ 身はならはし
の泪おちけり

旅宿逢恋

三一 中／＼にこよひ一夜のさねかつら あふさか山の名
さへうらめし

別恋

三二 きぬ／＼の曉露は又といふ ことのはにこそをかま
ほしけれ

恨鳥別恋

三三 とりのねをかねてきかすはとりあへぬ 別となりて
猶やうからん

惜別恋

三四 とりをこそ空なきしつとしたふ夜に かさねてつら
きかねの声哉

従門帰恋

二五 立かへる道とはしらてふかき夜に 我門をさへ明す
やあらまし

後朝恋

二六 ^(ハシ)かきなてし其くろかみのすちなれや けさ身に残
るみたれ心は

久恋

二七 つもり行としの泪ややかて我 なみたの川のひろせ
なるらん

二八 なからふる身は住の江においの世を 係とや人のつ
れなかるらん

旧恋

二九 つれなくてふりぬる恋よ津の国の なからふへくも
おもはさりしに

経年恋

三〇 としふれとこむといふなる人はこて 我老らくそ偽
もなき

契経年恋

三一 としへてもくちぬ契の名はかりを たのむ心の松も

つれなし

^(返)通書恋

三二 たのましな人の心のうらおもて これさへ文^(返)のかは
るをそみる

三三 たのもしな心もかくやうらおもて かはらす文につ
くす言葉」三

三四 くりかへしいくたひ見るも玉つきに こむといふな
る言葉そなき

三五 なをさりにいひはつくさし書とのむ 恨^(返)も紙^ナもあま
りあれとも

通書頭恋

三六 悔しくもたちしわかなよ村鳥の 跡ゆへならはかき
もやらしを

帰無書恋

三七 あかなくの別になきし鳥の跡は つらき名ながら猶
そまたるゝ

恋筆

三八 人やしらむあくぬ筆にはかきなせと 心のみゆる我

玉章は

稀恋

二七 あふ事はちよに一たひゐる塵の つもりて又やとは
むとすらん

偽恋

二八 こぬ夜しも恨ははてしとはしとて とふ偽もあれは
ある世に」

恨身恋

二九 むかふうちは我ことはりもいはれねは うき身のと
かになしやはてまし

怨恋

三〇 かこちやる此一ことゝおもふなよ いはて過にしう
たもこそゝへ

(因あれ)

恨絶恋

三一 此まゝにくみはたゆとも山の井の あさはかにやは
恨やるへき

忍絶恋

三二 一かたに人のとかにもなしはてし うき名につけて

おもひ絶なは

寄雲恋

三五 ゆふへこそ雨とはならめあま雲の たちの袖もな
としほれけん

寄海恋

三六 身にふかきおもひをとほゝわたつみを 貝もてはか
るためしにやせん」三三

寄草恋

三七 我かたにしけるもつらしあひおもふ ことなし草は
種なくもかな

三八 草の名をたのまはいつをはてならむ あはてやまし
のしけるおもひよ

三九 我はたゝ芹つめとてやむは玉の よるのいとまをと
はてあかせる

寄木恋

四〇 わりなくもおり／＼神にいのらめや さかさすま
の人もこそあれ

寄鳩恋

二一 うきしつむ枕のしたやには鳥の おき中川を床にな

かして

寄鳥恋

二二 我おもひかくてやまむ鳥の子を かさぬる世には

あふ身なりとも

寄獣恋

二三 おそろしといとふもわか身から国の とらのたくひ

に人やみるらん」

二四 今は身にと。ふす野へもおしかくす ねにひとつた^(ウ)

しにも待^(アシ)に過つゝ

雑

曉鐘

二五 むかしたれけふもくれぬと歎けむ ねさめに^{そかねのこゑ}つらき

はかなしき
かねの声々

古寺路

二六 いたつらに我身にかゝる老の坂を 高野の山にいっ

か分まし

樵夫婦

二七 いそけともさかしき道はねりそゆふ つま木しつか

にかへる山人

二八 をそくとく帰るにそしる柴人の 入にし山のふかさ

あさゝを

(欠) 因 (常よりもくたるそはやきかいるさの ^(マ) あらしをまく

るみねの柴人)

山家

二九 あらましの心はかねて住山に をくれてそむく身こ

そふりぬれ

三〇 世につるゝならひなりせは山にても むかしはさの

み住うからしな」二三

三一 住はてむ心そみゆる中／＼に をろかにわたす谷の

柴はし

三二 なき物に身をなしぬれは山かけも うき世も同じす

まひ^{なりけり}ならすや

三三 ふかく住を心あさしと人やみむ 市にも山のおくは

なきかは

三四 世をすつるたくひはあれと山よりも ふかき心に入

人やなき

三〇五 山かけにすむをも猶や故郷と なすはかりなるおく
をもとめん

三〇六 世をすつる心の道もかた／＼に わかれてあまたす
める山かな

三〇七 山ふかく我は入てや住かへむ いてつかふへき人の
庵に

三〇八 山かけにまれなる庵はいてゝ今 世にやつかふる世
をやそむかぬ

三〇九 山家路
すむ人の心あさゝやしらるらん このもかのもの山
のした道

山家戸

三〇 山ふかくすめる心（おほ）をとちはてむ 柴のあみ戸はあは
らなりとも

寄山雑

三一 何か世に住うかれぬと歎くらん 入へき山のなきに
しもあらず

田家

三三 かりそむる外面のいなは日（おほ）にはへて 秋風とをき小
田の庵哉

河

三三 時うつるひのくま川にいかてかは ひま行こまの影
もとゝめむ

越前国にくたりて孝景許にて、名所橋

三四 越路にておもひそわたる九重や くら戸のはしの名
をしのひつゝ

文明十七年三月廿一日、春日社にまいりて、事更にお
もひつゝけ侍し

三五 何事をなにともわきて祈らすよ 神にまかする我身
とおもへは

慈恩院にて、ある老僧歌を一首と所望し侍し」二四に、
興福寺繁昌ということを沓冠にきて旅の心を

三六 こよひねはうしとやいはむふみならし くらせるむ
まや時雨ふるてう

文明十七年二月二日の夢想に、贈大納言枕にたちて、歌

とくかきてと申侍しに

三七 朽はてぬ契あれは春の風 柳か枝に猶残るらん

親王の御方より水干をたまはりければ、よみてたてまつり侍し

三八 たまふなる二の袖につゝむさへ 猶あまりあるめく

みうれしも

御返し

三九 我はたゝ二の道にいりそめて まよふ心のしるへを

そ思ふ

大樹より古今集ということを折句によませらし時」

三〇 心とや君もめてけむむかしへを するはかりなる歌

のすかたに

こしはさみ

三一 此くれとしはしはまてと花の心 さても移ひ見ゆる

色かな

すゝり、かみ

三二 月草の花とは見えすすり衣 わくる野かみのゆふく

れの秋

文明十四年二月、遁世の心さしありて近州松本寿福寺

といふ所にまかりて、かしらおろし侍しに、大納言

殿、將軍よりとまるべきよし仰とありければ、よみて

まいらせ侍し

三三 かしこしな君につかへし道なくは のかるゝ山のお

くもとわれし

御返し

三四 君に先つかへし道はさもあらはあれ のかるゝ山の

おくはとひけん」二五

長谷御所よりたまはり侍し

三五 うき世をはそむくにつけていかなれば とひこさる

らん深山への里

返し

三六 そむく身の君にとはるゝうれしさを 苔の袖にはい

かてつゝまん

兼勝三位もとより

三七 すつる身の心にさこそ今までも ありしうき世のく

やしかるらん

返し

三六 今は身のやすきにつけておもふそよ　なとすてかね
しうき世なりけん

蜷川新右衛門尉親元か許へ、うさぎの毛すこしたへと

いふことを、沓冠(ツバ)とよみてつかはし侍し　* (●)不審

紙貼ル)

三九 うとからすさらは我せこ昨日見し　軒の木のしたけ

さも又とへ

返し　(●)さらはとひてん
(●)ナシ 親元

三〇 うとからすさらはとひてむ昨日見し　軒の軒の花な

れやけふ(●)はけりちらはけう

一もとに花のおほくさきたる菊を内へたてまつりし次

に

三二 むらさきの一もとときくも花ことに　千代のかすをは

つまむとそおもふ

御返し

御製

三一 一もとに千世のかすみる花の色は　山路に匂ふ種と

こそおもへ

潤戸鳥婦

三三 みねの雲帰るをみてやかへるらん　谷の戸くらき鳥
の　一こゑ

鳥

三四 彼の国の道しるへせようけかたき　法にあふむの名
をしのこさは

山路旅

三五 しほれけり山分衣おりのほり　ゆくてのをさゝ露ふ
かくして」二六

旅人渡橘

三六 秋の雨はいたゝのはしのけたよりも　こほれやすし
といそく旅人

羈中関

三七 告はやな我故郷をしる人に　あひつの関はけふこえ
ぬとも

浦舟

三八 ともなふや入江のすとり声たてゝ　さひしく出るむ
このうら舟

秋旅

三三 分こしををくるゝ人やさをしかの しからむ野へに
なしてまよはん

夢

三四 さたかなるうつゝはつめにかへらねと はかなき夢
そしく見ゆる
はいくたひもみつ

湘江

三五 舟つなく入江の水のふかき夜に 哀そへたる雨の音
かな

④(注) この詞書前の歌につく
内裏にて唐故人名所を題にて、歌つかうまつりしに、

張良

三六 つたへこし一巻よりや勝事を ④(ちさと)千里の外にしらせそ
めけん

王昭君

三七 さそなうきそのうつし急に偽の なき世なりせはか
ゝらましやは

④(つ)
述懐

三八 行末をたのむ人たにすぐる世を 何にかゝりておし

き我身そ

三九 時にあへる我身なれはとなくさめて あるにもあら
ぬ世をわたる哉

すくす

四〇 おほけなきねかひはかけし今は身の やすきをたに
もすてかたき世に

四一 すてはやな世のうき時はおもふかな ④(と)おもへはそれ
もやすからし身を

大樹、内大臣殿七廻とて、姉小路宰相すゝめ侍し百首
歌の中に、おなし心を」二七

四二 世中よあるはあるにもあらねとも なきはなきまゝ
過るかなしき

歎身述懐

四三 うしとてもさてもそむかぬ世中よ ④(はつ)人のおもはむ身
をは恥れと

老述懐

四四 何をしておいぬる身とも今はたゝ ④(はつ)心のとふにこと
のはそなき

侍従、大納言父公三十三廻忌に、經のつゝみかみによ
みてつかはし侍し

三五 おもかけの忘れぬとしはいつのまに 五の六を過し
夢路そ

返し

三六 いときなき夢にまされし歎をも 三十の後のけふそ
おとろく

細川右馬頭道勝、父道賢入道廿五年経つかはし侍し
に」

三七 さらに又面影ちかきむかしかな 月日や人をさそひ
きぬらん

おなし香典にそへて

三八 もらすなよねかひの玉の一くりも おほくの罪はき
えむとそおもふ

思往事

三九 見る／＼もおとろかぬ身(因)よ我よりは 後に生て先に
たちしを

寄玉懷旧

翻二 染 軒 詠 草

三六 つてにてもいかにとはましなき人の 玉のありかを
しる世なりせは

披書知昔

三七 そのかみにあつめし雪をかきわけて ふみゝる道は
いまでも絶せず

遂日懷旧

三八 年もへぬきのふを忍ひけふを惜み 又あらましのう
ちに暮して」二八

三九 さりともと花まひなしにうつされし 名のりもさら
はあらぬ身ならて

尺教

四〇 くめはふかくあふけはたかしわしの山 宝の池にそ
める月かけ

弥陀の名号を句のかみにきてよみ侍しに、寄水釈教
三一 ふかき江になかれあふへき契まで むすふあかみの
末もたのものし

神祇

四一 いく世へぬ神さへねての朝熊や むかふかゝみの宮

めくもらて

祈世神祇

三三 祈るそよ神のましはる塵^{因(ちか)}ひちの 山となるまで代を

すなほにと

三四 世を祈り君すなほにと心をも わけいかつちの神や

しらん^{因(る)}

社頭松

〔欠〕^因 (神と君行あひのまの霜やたひ 契をきける松そふり

せぬ)

^因 (社頭柳)

三五 岩戸あけしそのかみつらにかけまくも かしこき玉

は今もくもらし

庭鶴

三六 千代ふれはこれそ手の舞あしたつ^{因(の)} ふむかすしら

ぬ庭の真砂地

松作友

三七 ともなはゝつるのかひこの巢くふまで みとりにし

けれ宿の松かえ

祝言

三六 めくみあらは富^{因(留)}はたしてよ今は我 ことなる事も何

かいのらん

(五行分空白) 二九